



成功は最後の一步

に伸びんも測られねき、寧ろ盛時を追憶するに傾く、明治年間には建國以來最も盛んなる時代云ひ、實際なる形跡あり、其の時代に生存せる者は以つて幸福とするの當然なるか、後と較べて如何なるべきや、隆盛に次で衰頹の萌すべきや、將た明治年間は一の階段にして、大正年間に愈々益々發展すべきや。

タイムスの東京通信所は疑ひを挟みたれき、總じて何人も衰頹の萌すを想はざるべし。生來悲觀の癖なき限り、何の點より觀るも、後の前に劣るを判斷する能はず。而も大正年間には明治年間に非ず明治の繼續なれき、繼續は同一事を繰り返すを意味せず、若し異なるの避くべからずんば、善き意義に異なるか、改元してより僅か一月半未だ比較の材料備らざるも、世は賽の目ならず、さまで豫想し難き者ならず、來年の事を言へば鬼が笑ふも同時、到る處十年計畫あり



り數十年計畫あり、時に或は百年計畫もあり、知らざるを知らずすべきも知り得るを知るに務むべし、明治は大正と變遷し、何事にも充分の差違を認むるも、中に最も著しきは、戦役の有無ならん、明治は謂ゆる撥亂反正の時代にして、戦役の起るの多く初年に伏見鳥羽を初め、上野會津長岡函館の戦争あり七年に佐賀の亂あり、臺灣出征あり、九年に秋熊本の亂あり、十年に西南の戦役あり、十五年及び十七年の朝鮮の變を経て、二十七八年役あり、更に三十三年北清事變を経て、三十七八年役あり、眞に戦役三云ふべきは三回到過ぎざれご三回にせよ政府に於いて全力を盡し臣民には舉國一致以つて事に當れる目して戦役の多き時代と爲さざるべからず、幕政が王政となり、封建が群縣となり支那の一部視せられし者が、世界の強國に列するに至れる皆大小の戦役に負ふ

成功は最後の一步



成功は最後の一步

事多く、十七年授爵式ありてより順次各爵を増加し、特に男爵七十余名が、三百八十余名に上れる、亦戦役に負ふ事多し、授爵階級は戦役に次いで外交に於てするが、外交も戦役に功の顯れ易きもの、要するに戦役は明治年間第一の事蹟ならずんば、少くも主要なる事蹟の一に居る、世界の戦役の絶えざれき千八百六十八年以來、何國が我國の如く戦役多かりしぞ。

大なる戦役を経たりし後に比較的長く平和の續くの常にして、獨佛は存亡を争うてより今に四十一年間、全く無事に経過し來れり。而も無事に過ぐるが故に國民の幸福なるか言へば、戦役こそなれき、負擔は年々重きを加へ、軍備の點に於いて戦役當時より幾倍も擴張し、文字通りに武裝的平和を實現し來れり。明治年間に三戦役を経ては、天正年間に恐らく戦役の起らざるべく、例へ



大陸に出兵するも、戦役三名づくるに至らざらんか、之れが爲めに軍備の負擔を減ぜず、或は民力に不相應なる程、負擔を餘儀なくさるべし、明治は戦役の多かりしも、兵數噸數に於いて多からず、缺乏に堪え必要に應じて戦ひしなるが、今後は戦役なきも兵數噸數の増加すべし兵數は更らに著しく増加する事なきも噸數は何程に及ぶべきや、豫め知り易からず、軍備は世界を通じての難問題にして何國も其の負擔を減じ得ざるべきやを考ふるが、日本は國富の足らずして他の列強に對峙し、超ドレットノー式の出づれば、直ちに同式を作り超々ドレットノー式の出づれば又直ちに之れを作らざるを得ず、一噸一千圓、而して新式の出づるに共に、舊式は殆んど廢艦同様なる英國は噸數に於いて二國聯合に當りながら、新式の出で、より、獨國に大差なく、幾多の軍艦はあ

成功は最後の一步



成功は最後の一步

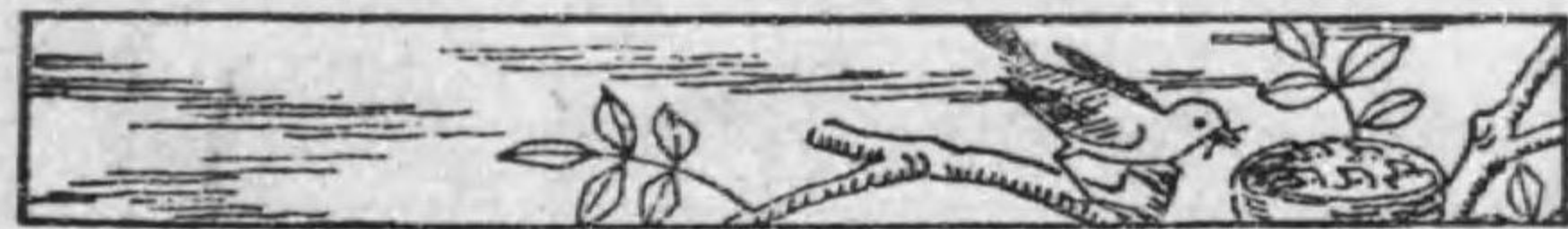
れども無きが如し、日本も太平洋に地步を占むるが爲めに噸數を競ひ新式を競はざる能はざるが、之れを競ふて遂に何處にまで達すべきか、而も戦はずして負擔の増すに、戦つて負擔の増すに孰れの増るべきか、戦つて勝つも、戦はざるより一層の負擔を増すべきか、或は實用なき負擔を増すは、寧ろ實用に供するに若かざるべきか。戦役の起らざるは授爵、陸爵の都合よからざるも、ビュローが戦役なくしてビスマルクと同じく公爵に爲れるが如く、幸福なる戦役なくして恩恵に與かるべきか。

今は創業守成の別なく、常に發展を念せざるべからざるも、若し明治大正創業守成の別ありせば、前者に戦役ありて後者に之れ無き事たしへ、後に戦役あるも前は多からざる事す、馬上にて國內の治平を致し國外に利權を擴



張し得たる後、少くも當分の中、馬上にて國事を料理するを要せず、別に爲す所あるべき順序なり。軍備は須臾も怠るべからず、強國たるの位置を維持するに整ふべきも、苟も之れを整ふる以上、正に戦はずして勝つべき時なり。三十七八年役、出征軍人を送る者に告げて曰へりき、武力の戦争は我等の任なり、我等は之れが爲めに身命を抛たん、平和の戦争は諸君の任なり。諸君宜しく之れが爲めに努力すべし、平和の戦争は武力の戦争より難し。初め何人の言ひ出し事なるや、相期せずして此邊に考へ及びしや、兎に角陸軍も海軍も、稍々思慮ある者は、皆な此の言を置土産にして去れり。熟々考ふれば事は出征軍人一時の撓捺ならず、實に武力の戦争終りて平和の戦淨はじまり一年激しきを加へ舉國一致にて武力の戦争に従事せしが如く舉國一致にて平和

成功は最後の一步



成功は最後の一步

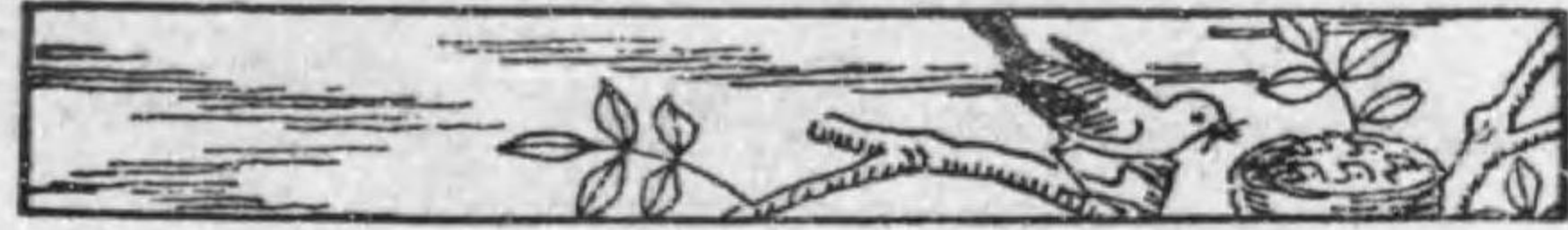
の戦争に従事すべき勢の迫れり。唯だ武力の戦争に統卒者あり、大元帥の下に總司令官總參謀長等あり、上命じて下從ふに定まれど、平和の戦争に統卒者なく、各自獨斷專行の己む得ざる者あり、銃丸に中たらざるも、心配の餘りに病を招くあり、武力の戦争に在りても、兵卒の突貫するよりは、戦線より遠ざかれる司令部員の心を悩ますが如く、平和の戦争は易きに似て決して易からず武力の戦争も、智力を假る事多けれど、平和の戦争は盡く智力の競争にして智力の多寡にて勝敗を決定す、大正年間、我が日本人が智力に於いて歐米人と同じ以上なるを示すべき時代ならずや。

平和の戦争は、武力を除ける一切の競争を指し、範圍の頗る廣きが、普通の解釋にては、言ふ迄もなく産業にして、産業の別名とするも不可なし、産業の



種類の多き中に、廣く世界に關係し、官吏議員等に面接する機會の多きは商人にして、商人は産業關係者を代表するかに見ゆ、明治以前に商人の賤まれ、四民の最下等に置かれし丈、明治に入りて位置の高まるに共に、自ら視る事高く、須らく士農工商の順序を顛倒して商工農事となすべしと唱ふるに及ぶ、平和の戦争の名あるも、商人の利を射る、寸分の油斷なく、緻密に計畫し、猛烈に突撃する恰も實戰の如くなるが爲めにして、巨額の金を得るも、他に能く及ぶあるなし昔は槍先の功名を以つて領地を得、或は森林田畑を以つて城主を凌ぎしあるも、今は富を得る事商人の如きにあらず、現に最も日本に富めるは商人にして一代にして全國を一二を争ふに至れるあり、米國には一代にして此の二十倍にせるものあり若し富國強兵を兵つて國家の最要件とせば、商人が國

成功は最後の一步



成功は最後の一步

家の重きを以つて任ずるは強ち僭越なるに非ずして、大正年間に平和の戦争を事とする場合、其の最も勵精努力せん事を望まざるべからず、其の功ある者に授爵陞爵する、必ずしも不可ならず、功の大なるは、軍人にして功の大なるに譲るべくもなしされど、商人は一樣ならず、海外に貿易し、外國の富を日本に入る、も商人なれば、官吏に結託して國庫の金にて廉價なるを高價に遣はしめ、高價なるを廉價に拂ひ下けしむるも商人なり、必需品なる穀物を買占め、人の飢えんむする時、非常の高價にて之れを得るも商人なり、商人が富を造るにて、如何なる商人をも優遇すべしせば、法律の網を潜れる盜賊をも優遇するに終らん。古來商業の繁盛して國の衰へたる其の例に同じからず、商の爲めに衰へたるにあらず、悪商の爲めに衰へたるなり、支那に軍隊の必要なれど、



不becomeなるも軍隊なり。動もすれば民家を掠奪して己ます。兵の國を禍するに非ず、悪兵の國を禍するなり、商人も此に同じ。
今日迄我國商人の頭腦を支配するは、濡手に粟を掴むにあり、以前ほぎならざれど、多數は尙ほ然るを免がれず、我國に限らず、一般に濡れ手に粟を掴みたく思ふも、商業繁盛の地は多年の經驗にて其の概ね空想に屬し、寧ろ遅くも健實なる方法に於てするの優るを知れり、我國は商業らしき商業の起りてより歳を経る事多からず濡れ手にて富巨萬を致せるあり、滔々相率ひて之れに倣はんし何處に粟を掴むべきかに惑ひつ、あり、我にも相應の商人の輩出したれど其の数の少なきのみならず、最も幅利きの稱せらる、は、嘗つて惡辣なる手段を廻らし、唯だ法律の不備にして問はれざりしあり、岩崎氏の如き、商

成功は最後の一步



成功は最後の一步

人の殆んど神とし崇拜する所、而も其の富を得たりし手段は頗る議すべし。航海獎勵金を得、之れを航海よりも他に利用せしが如き、政府當局者の粗漏を咎むべきも其の粗漏に乗じ、費すべきに費やさずして、自ら私せしは、決して商人の模範とするに足らず、當時の毎年二十五萬圓は今日の幾倍に價す、之れを利用せしは自らの爲めに計りて智なるも、國家の爲めに不心得なりされど斯かるは尙罪の輕きもの、専ら航海に費さざりしも、幾分か費せしに相違なし、他には斯くまで金額の多からざるにせよ、官吏に結託して國庫金を竊みしに異らざるあり、御用商人の名あるものにして、幾何か斯かる嫌なき者はあらず、此の類の商人が如何に多くとも、國家に何の利益を與ふべき、多ければ多き程、勢力を得れば得る程、愈々國に禍せずや。時に禍するも、禍を償ふに足



らず、商人は金の多き以て稱すべからず、之れを得る手段の空しきを以て稱すべし、岩崎氏は逆に取り、順に守り能く今日あるを得たるが順に守るは倣ふべからず。而して其順に守るは、特に工業に盡くす所に顯はる、自らの爲めに計られるにせよ、工業の發達に與かれる事少からず商人らしき商人の一人も多からん事を望むも、我國にはさしあたり、良商よりも良工出でん事を望むべし商業のみにても富を作るに足り、實際面の如く速かに富を作り得る事なければ工業に伴はざる商業は根底なく、盛んなれど何時衰ふるも測られず、多くの投資者中に若干人の富を作り、富豪として立つあるも、國民の大部分は生活の程度の高まらず、國民の富み、重き負擔に堪ふるは、外國の競ふべき工業品の豊なるよりす、國家に適當なる新發明新意匠は、其の直接の利益を外にし、民心

成功は最後の一步



成功は最後の一步

を刺戟し新事業を勵ましむるにも大なる利益あり。
此に至りて考ふべきは、明治年間の教育なり、明治に於ける教育の進歩は著しく、官立大學卒業生一萬數千、内死亡者百分の九に過ぎず、他の諸學校皆なこれに準すべきが、大正年間には此等教育を受けし者、現に受けつゝあるもの及び將に受けんとする者の大ひに活動すべき順序ならずや、明治にも、卒業生は各々職に就きしも大抵官吏又は銀行會社員となり、而して新たに官吏若しくは銀行會社員を爲り難くなりてより、頻りに就職難の聲を聞く、今後諸學校より卒業生を出す事益々多く、大學及び、専門學校も増加し、就職難の聲、いよ／＼激しかるべきが、大正年間には學校の教育よりも、國民各自の能力發揮を主眼とすべし、明治には人を教育するに急にして、其の卒業して何を爲すべき



やまで心配せしも既に卒業生の多く、到る處相應の教育を受けし者ありては、學校に職業との連絡を問ふを得ず、人の尋ねるは卒業證書よりも能力にして、己れの恃むべきは又卒業證書よりも能力なり、今は人々各々職業ある可き者認め、國家に必要な事、社會に必要な事、人類に必要な事を爲すを心掛くべく、早く言へば前は學問を教ふる時代にして、今は學問を活用する時代なり、教育は益々盛にすべきも教育は手段にしては目的にあらず、手段は手段とし能ふ限り目的の爲めにつくすべし前には學生が、下級より順次上級に上りしが如く、卒業して官廳若くは銀行會社に入り、順次下より上に昇りしが、斯く人の境遇を限るは、國民の活動を活潑にする道ならず、官廳に入る者は入り、入らざる者は入らず、銀行會社に入る者は入り入らざる者は入らず、働く者は

成功は最後の一步



成功は最後の一步

働らき、倒る、者は倒る、に任すべし、國家は人に要求するあり、社會は人に要求する所あり、人類は人に要求する所あり、其の要求は限りなし、其の何を己れに要求するかを考へ、之れに應ずるに務むべし。我が日本を米國に較ぶれば足らざる所多し、獨國に較ぶれば足らざる所なし、英佛に較べて、足らざる所多し。和蘭、白耳義等の小國に較べて、足らざる所多し。足らずして不可なきは其の儘にすべきも、不可なる者の多きを奈何せん、教育を受けし者は、各々日本に歐米を比較し我足らざる所を補ふに務めんか、必ずや爲すべきもの多きに忙殺せられん。

大正年間、軍備擴張に苦しみ、其の桎梏を免れんを欲して得ざるも、戦役に遭遇するに少かるべし。たゞへ爆烈彈を個人若くは團體に投ずるものあり



こも武力を以つて政府に反抗するものなく、薩南戦役後に内亂なしにして妨げず、列國との關係も、同盟協商の多ければ、時に紛議の起るもの、多くは平素の間に結了すべし。斯くて戦役に遭遇せざる代り、産業の發達に勞し、戦役に於ける憂慮努力を産業に移すべし、武力時代去りて産業時代來るにいふも、此の意義に於いて聽くべく、軍備を撤去するに非ず、軍備を備へつ、戦役に遭遇せず、偏へに産業に勵むを得るなり、更らに教育の時代去りて學問活用の時代來り、法政は法政、醫藥は醫藥、文藝は文藝、理化學は理化學、土木機械は土木機械、農林は農林、各自の能力に應じて活用すべし、教育の時代去るに教育を要せざるに非らず。愈々盛んにするに努むべきも單に教育を最終の事とせず。教育の結果を治むるに力を注ぐやう有りたし、生活の爲めに職業を求むる

成功は最後の一步



成功は最後の一步

こいへば言ひ得んも、軍人が俸給勳章等を念ふよりも、専ら君國を念ふし
又は何程か君國を念ふするの遙かに多く能力を發揮し得るが如く、生活の爲め
にするよりも、國家の爲め、社會の爲め、人類の爲めにする方、多く能力を發
揮し得べし。ものゝふの矢橋の渡し近くも急がば廻れ瀬田の長橋、職業を求
むるに汲々たるは、急いで損する者にして、自己よりも大なるものゝ爲めにせ
ば、世に如何なる缺乏あるかを察し、これを充たさん務むべし、人の生活難
就職難を憂ふるも、己れ自らは之れを嘆せず。忍耐して努力すべし、若し個
々人々、各々世の缺乏を充たす所あらば、大正は明治と違ひつゝ、時代とし秀
づるに於て同じ、農工商の世界的に爲り、二三箇國の戦役が、他の總てに影響
を及ぼさば、期せずして戦役の廢止を見るべしこの説あるが、大正年間に大に



産業の發達せば世界に於ける此の機運を促すに與かるべし、暫く之れを夢想し
し眼前の必要よりするも、明治の狀態を異にして大に爲すべきあり、明治年間
の國史及び世界的に著しき時代を形づくるを認むるに共に大正年間を著し
き時代とするに務めよかし。

◆乃木將軍死して教訓す

道義の外形は土地にて違ひ、時代に違ふても、一線の貫穿し、古今東西に亘
り替はらず、現代にも傳説的英雄（レゼンダリー、ヒーロー）の出で、大なる
刺戟を民心に與ふるにあり。ガリバルディーは古代希臘人か、近世伊國人か、
孰れも言ひ難し。英のゴルドン米の石壁ジャクソンも、現代人と思はれず。

成功は最後の一步



成功は最後の一步

而して現代人にして能く職務を果せり、西郷南洲の如き、希臘人ミせば希臘人、羅馬人ミせば羅馬人ミ見ば、此等は皆な多少著しきもの、幾分か此に似たるは、國ミして、代ミして、之れ無きはあらず。地球は時々刻々廻轉するも、常に中軸を失はず。中軸を失へば四時全く亂る。

乃木將軍はガリバルディーほご飄忽ならず、ゴルドンほご奇矯ならず。若しジヤクソンが今少しく奇なりせば、更に類似したらんミ思はる、が、四十にして斃れ疑問ミして遺れり、利慾を離れ、精神の凜然たるは、概ね才幹に乏しく、大功を樹つるを難んずるが、乃木將軍は兎に角旅順の戦勝者ミして世界に鳴れり、而して其の人を觀れば歐洲を渴然して已まざる傳說的英雄の性格及び態度を備ふ、傳說的英雄は何處よりも議論し得れり多數の人に與へたる印象は、如



何なる議論より力あり。

楠 正成湊川の戦死は、屢々非難を被り、福澤は之れを權助の縊死に比せしが、爾後此等の非難の爲めに何の影響を被らず、折角奇拔らしき議論は、全く人に忘れられ、而して正成の身を以つて君國に殉せし史實は依然ミして人に感化を與へつ、あり、廣瀬中佐は七生報國ミ書せしも幾多軍人の一人たるに止り進んで死せしもの、進んで死せざりし者、皆な等しく楠公を忘れざりき、之れを冷笑する者は、或は富巨萬を積むべし、或は城の如き邸宅を構ふべし、而も觀る者、聽く者、路傍の馬骨ほごにも思はず、間々羨望するも死ミ共に忘れ去る、福澤は故らに異を立て人を啓發せんミし、尋常冷血者流ミ同じからず。其の瘦我慢説を見ても、眞意ミ口外せる所の相ひ異なるを察すべきが猶ほ金の爲

成功は最後の一步



成功は最後の一步

めに意見を變ぜる事、管に三四ならざるは何ぞ。
乃木將軍の死て議論の紛々たるは、事の當に然るべき所、人に議論の自由あり、何を言ふて怪むべきに非らず。而も殉死の是非を論するなき、餘りに見當外れなるに驚ろかざる能はず。斯かる事は舊幕時代に於いてすべく、其の時代さへ既に議論の盡きし者多し、將軍の死は殉死の點より、見て殉死なるも、其の故を以つて單に殉死とするは、日本に山多きを以つて山のみ多するに同じ若し一侍従にして、殉死せしならば殉死に就いて幾分の議論を費すの不可なきも、今日迄ざる出來事なく、今後も有るらしく無し。將軍の死は斯かる殉死に同一視すべからず。

さらば將軍は何故に死せしか殉死の意義を含むも他に更に多くの意義を含む



を認むるに難からず。遺言第一條に『明治十年の役に置いて軍旗を失ひ其の後死所得度心得候も其の機を得ず、皇恩の厚きに俗し今日迄過分の御優遇を蒙り、追々老衰、最早御役に立つの時も無餘日候折柄、此度の御大變何共恐入候』とあり。軍旗を失しを愧ぢ、爾後死所得んとして得ず。而して漸く老衰し、如何にするが最も御役に立つべきやを考へ、終に殉死するの最も効果多かるべきに思ひしなり、自ら思ひ及びしが如く、將軍老後の行爲として最も効果多き事とすべし。

軍旗を失ひし罪は事情を斟酌され、別に軍旗を賜りたるが、責任を重んずる限り、省りみて幾何か不安を感すべし、臺灣を死所とせんとし、事意の如くならず空しく母をして鬻地に死せしめしも責任を重んずるの限り、省みて幾許か

成功は最後の一步



成功「最後の一步」

不安を感じずべし、三十七八年役、波羅的艦隊の廻航の日々迫るあり、宜しく南山を陥れ、勢を以つて一舉に旅順要塞を陥るべし。總司令部に於いても考へ所にして若し攻圍軍に於て初めより工兵をして坑を掘らしめ、日に僅か宛進みしならば、必ず非難の聲、大いに揚りたるべく、失敗してこそ一舉に陥るの無謀を知りたれ、當初曾つて之れを慮かりなく、獨り攻圍軍司令官を責むべきに非らず。されど責任を重んずる限り、計畫の宜しきを得ず、無益に多數の壯丁を失ひしを悲まざる能はず、將軍は子を受せざるに非らず。故さら危険の地に立たしめしは、自らも續いて死し、世に申譯せん。欲し。なり。

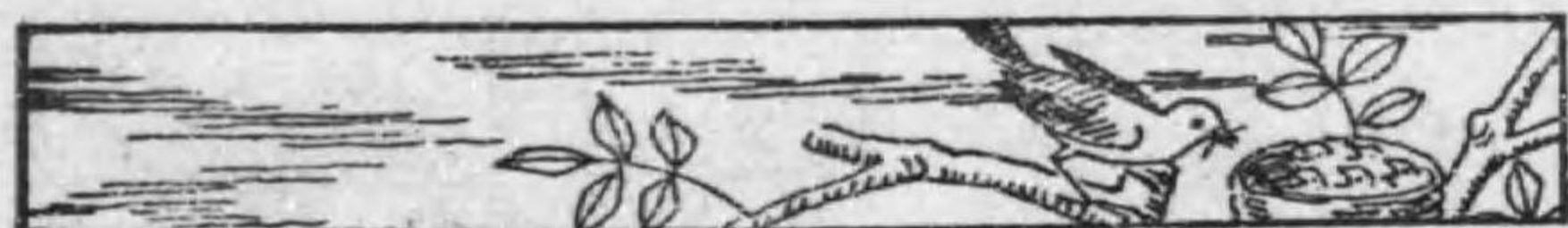
されど一たび失敗し、早くも攻圍の計畫を改め、徐々に坑を掘りて進み、遂に難攻不落の要塞を陥れ、世界をして日本兵の勇敢なるを感歎せしめたり。



英國皇帝の戴冠式に臨みて大ひに歓迎され、他の國にも歓迎されたるが、斯かるをこそ一將功成萬骨枯と謂ふべきに非ずや。時は將軍の自問自答せし所思はる。が、如何にや。將軍は多く言はされど、平素責任を重んずるの厚きよりせば、己れの愈々歓迎さる。につけても、愈々不安を感じたらんか。

聖天下の殊遇を蒙り、滿天下に敬意を拂はる。身、空しく死すべからず。苟も死すれば、己れの最後の奉公たるに値すを要す。將軍は思慮周密、單に感激して死する者ならず、感激するも、職分を忘れず、死するに先んじて必ず君國の爲めに肝膽を砕かん。將軍は省みて不安を感じるも、其の不安の感すべき事件は、同僚軍人の尋常視する所にして、己れ獨り不安を感すべきに非ず、人は邸宅を壯大にして馬車を馳せ群衆を叱咤す、己れ獨り慎しむべきにあらず。さ

成功「最後の一步」



成功は最後の一步

れど熟々軍人の實情を察するに士氣廢頹の頗る憂ふべき者あり、大陸に櫛風沐雨せしは、君國の爲めなるも、論功行賞されたる者は官よりする收入の外、土地を賣買して利を得るあり。商人に結託して利を得るあり、姑く此の類の事を世間の常とし、黙して過ぐるも、上官に於いて公務の餘暇に營利を念とし、或は公務を棄て、營利に専らなるは、少壯軍人にして奉公の念を鈍らすの恐れなきや、士氣頹廢せば、今後の戦役に能く以前の如くなるを得ざるに非ずや。將軍の官職を奉ずる、俸給を受くるが爲めならず、君に命ぜられ國に委ねられたる職分の爲めにして、職分に全力を注がざるべからずせり。然るに多くの官吏を見れば、既定の事務を執るのみにて他は商賈に撰ぶ所なく、苟も利を見れば之れを失はざらん事を期す天子の御病床に伺候し、其の質素なるを見奉



りても、官職を利用して榮耀榮華に誇るの餘りに淺ましさを感ぜざるべからず侃諤の論議を事とする者は或は之れを戒め、之れを罵らんも事情に通ずる者は其の高く益なきを知る責めらる、當人自らは不快するのみにて心中より改むる所あらず、他の滔々たるものは、尙更ら感ずるなく舊に依りて舊の如し。帝國の運命が露國との戦役を絶頂とし、漸次衰頹に就かざるか問はる、は他なし武官も、文官も、世間一般も、奉公の念を感じて私利を射るに傾く疑ふべきを以つてなり、是れ口舌の防ぎ得べき所にあらず、幾分か矯めんせば、或非常手段に出でざるべからず。

學習院長として、華族の子弟を教育するは、之をして皇室の藩屏たるの實を擧げしめんとの思召を受けて孜々汲々青年の薰陶に従事するも、畢竟何程の効

成功は最後の一步



成功は最後の一步

能ありや、我が言ふ處を聞き、我命する處に従ふも、其の精神は何條あるべきや。忠君愛國は形式に流れ、陽に之れを口にし、陰に之れを冷笑するの跡なきや。如何にして之れを陶冶し、附託の任を完ふすべきか、藥瞑眩せずんば病癒へす、之をして心臆を寒からしめ、然る後に幾分の効果を見るべきか。人は職分に全力をつくさざるべからず、責任ある者は其の責任を果たし、之れを果し得ざれば斃れてやむべきのみ、將軍は職分を盡くさざりしにあらず、殆んご何人よりも之れをつくし、かき、仔細に考ふれば幾分の遺漏を免れず、人は遺漏を尋常なりし、苟くも免れて榮耀榮華に誇るを智なりとするが、此の狀勢に押して行がば一身一家の利害を専らにし、君を忘れ國を忘るゝに至らざるか斯かる事の尋常ならば、木の右に曲ををむるに、先づ之れを左に曲ぐる



が如く尋常ならざる事を敢てし、人の反省を促すの必要あり、即ち一身一家を君國に獻じ、一物を遺さずんば、尋常なる者も此の非常に驚ろき、少しく顧慮する所あらん。

議論の紛々たるも、殉死の報道を得たるものは、或る少數を除き皆、思はず襟を正し、にあらずや、榮耀榮華に誇りし者も、談の將軍の殉死の一事に及べば抑損の色を顔にあらはるゝを免れず、固より或者は嘯ぶいて卒然たり、乃木は頑辭なり、時代後れなり、世に惡風を獎勵せりなき頼りに非難の聲を揚ぐ。馬は馬連、牛は牛連、縁なき衆生は度すべからず、こころしく將軍を了解せん事を、望むも不可能なれど、彼の非難するものは、遂に何をか能くすべき一時尤もらしき事を口走るも、時代の淘汰に遭遇し、早晚こころしく消滅すべし

成功は最後の一步



成功は最後の一步

將軍の如く一身一家を君國に獻せし例は、他に多く之れあらず、其の位置の高きだけ、刺戟も強かるべし將軍自らは必ずしも殉死の効果を考へず、天子の殊遇を蒙り、其の崩御に殉すしたらんも之れ思慮の足らざるにあらず、多年思慮し來れる所、最早思慮するを要せず、無意識に事の宜しきを得たるなり。非難するものも、其の刺戟の強きを否定せず、單純なる殉死なれば人の模倣する程悪影響あれど、死して職分を完くせし明白なるからは、此に倣ふ者の多き程、善影響なりと謂ふべし、當分議論紛々たるも、歳を経るに共に効能の顯はるゝや必せり、其の人心に於ける刺戟に較ぶれば紛々たる議論は塵よりも輕し。



◆何處に模範人物を求むる

諸學校の倫理教育に古來の人物を例に引き、成功若くは處世法を説く者の或る人物を例に引の常なるが如何なる人物を擧ぐるの最も適當なるかは猶ほ頗る明白を缺く、甲の擧ぐる所は乙之れを悦ばず、乙の擧ぐる所は甲之れを快しませず、例に引くの却つて引かざるに劣る事なしとせず、人物論は維新前まで略々一致し、楠公と言ひ、赤穂義士と言へば、世以つて士たるもの、模範と爲し之れを否認するは極めて少かりき、林子平の楠公の小なりとし、太宰春臺の赤穂義士を批難せし如きあれど、寧ろ僻論と見做されし跡あり、然るに維新よりして變遷の著るしく、既定の説に對し、一とて疑を挾まざる無し、福澤氏が

成功は最後の一步



成功は最後の一步

楠公を權助に比し、赤穂義士を以つて事理を解せず爲せしは、奇矯に聞えしにせよ此等の議論を掲載せし册子が廣く購求せられたる事、時勢の一變せるを證せずや。爾後動あり反動あり、反動の反動ありしも、數十年來の劇變は他に類を見ず随つて前に模範として欽崇せし所も、宛がら別世界の人物なるが如く例に引くも適切に感ぜられず、而して更らに何様の人物に則らんかを見るに、往々言ふに足らずに考へらるゝ無きにあらず斯かるは果して事の然るべき所なるか。

事の然るべき所を言ひて妨げなければ、此に就いて聊か慮るべき無しとせず、變遷の較著なりて元々前代社會の發達し來りしもの、或る程度まで全く事態を同じくするに相違なく、推して究むれば新たなる分子の意外に少なきも



測り難けれも、小兒は大人の父にして、而も大人と同じからず何の邊まで同様に認め何の邊より異様に認むべきかは、深く考ふる所なかるべからず。要するに差異の明らかに見るべきは外形に存し内實を分拆して左程ならざるを覺えずや。特に七百年間武門武士を以つて秩序を維持し來れる國柄にて、政治及び軍事に於いて整ひ、後より顧みて尊重すべきものに乏しからず。七百年間に傑出せし人物は、皆に模範として不足なきのみならず間々世界の大人物と拮抗するに足るを察せらるゝあり、固より武斷の結果として政事は軍事に從屬し、單に政治に傑出せし者より軍事を兼ねて傑出せし者遙に多し、北條氏多く政治に長じ軍事に短なれど猶ほ純然たる政治家にあらず、況んや信立の如き、信長の如き、秀吉の如き、家康の如き、頗る政治的技術に長せしかも、世に立つ所以の

成功は最後の一步



成功は最後の一步

ものは實に軍人にしてなり、随つて政治家としての模範を求むるの困難なるが軍人としての模範を求むる、誠に幾十の多きに及ぶ、源氏は世々好軍人にして義家の如き、最も疵なき者、義経の疵多くして、而も稀有の天才なり、戦國に際し、良將の計ふるに堪えざるが謙信に至り、技倆の卓絶に加ふるに、志操の絶潔、行動の明快を以つてし、眞に稱して軍神と爲すべきを見る。これに似たるを求め、其の人を得るに難からざるが、唯軍制の變じ、戦術の變じ、規模の大小に於いて同日の談に非ざるが爲め、模範を世界に尋ぬるの普通となり、奈破翁若くはモルトケに擬するの少からず。是れさへ既に時代を異にし、何んなく縁遠く感じ、日露戦役後、該役に秀でし者を模範とする傾向ある事、誠に避くべからざる數なり。



當代我國名將に富む、之れを模範として不可なきが、唯、今日や、將帥の力よりも軍隊の力を以つて勝つての明かにして、個々人々として如何に心を用ふべきかといふに關し、裨益する所多からず、大山元帥は屢々大戦を决行し、大捷を博せしかぎ、後進の之れを模範とし學ぶべきやは疑はしきせず。其の將に將たるの能ある、將た勝敗の間に自若たる、皆な則るべき者なるも、今一層具體的に模範とするには、餘りに茫漠に失せん、故兒玉大將、野津大將、並に現在の奥大將等皆な範の垂る、所あるが、軍人の模範は、戰場に於ける技倆の外、精神的に感化を及ぼす所あるを要す、技倆の缺くべからざるは言ふまでも無れき、事々物々組織立ちし今日、最早や運用の妙を一心に歸すべきに非ず、軍隊にして精練し、且つ員數の充分なれば、凡將も雖も尙ほ大ひに戦ふに足るべく

成功は最後の一步



成功は最後の一步

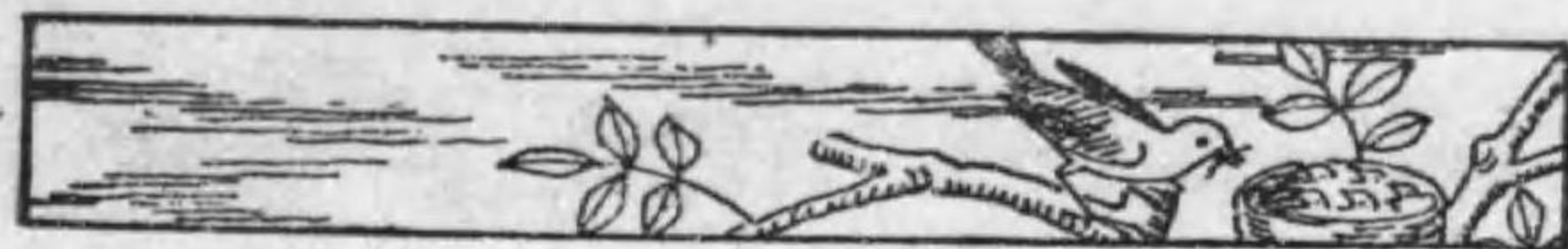
今は軍人として心すべきは、特に身を處するの純潔あるに在り、多數を以つて勝つべき時代に於いて一度び風紀の紊れ相牽いて私利を念みせんか軍隊ありき雖も尚ほ無きが如し、殷鑑遠からず、獨國に戦ひし佛國あり、近くは我國に戦ひし露國あり、憂ふべきは此の點にして、軍人たる者は夙夜此の弊に罹らざる様心掛ざるべからず、故乃木大將の如きあり、尚ほ他にも之れあるが、此等を模範とするに同時に、間暇あれば書を繙き、過去中外の純潔なる將帥の言行を稽ふべし、我に在りて謙信に稱すべきは實に此れに在り。英國のゴルドン米國のストーンウチル、ジャクソン等、孰れも貧夫をして廉ならしむる者、押金を以つて名ある國、尚ほ彼の如き人あるかを思へば、日本魂の軍人、苟も私利を事とするの大に愧づべきを認めずや。近くキツチエナー元帥が、十年身を亞弗利



加に曝らして勞せず歡迎を避けて印度に赴任し、北門の警戒に専らにし、日本に立ちよりて軍事研究に資せんしせしが如き、特筆を値せずするも一時の功に誇るもの、省みて愧死すべき所なり、軍人の模範とすべきは、技倆のみに在らず、又人格に在り、實に人格を以つて最となす。

封建時代に相應の時代あり、或は藩は頗る備はり、吏の以つて模範とすべきありしも、廢藩置縣と共に事皆一變したれば、或る特例を除き、何等應用し得べくも思はれず、吵たる一小藩にも偉人の存せしかご、之れを尋ぬるは史家の任にして、政治に奔走する者の散てし得る所にあらず、されど立憲政治を爲りてより、未だ模範人物とすべき者の輩出せず、模範を求むれば、勢ひ歐米に於いてせざる能はず、彼れ歐米は年代の久しきだけ、政治家らしき政治家に富み

成功は最後の一步



成功は最後の一步

たこへ大政治家少くとも、學びて不可なき者列擧に違あらず、國勢を異にし、風俗を異にするも政治の要訣に於いて共通するを覺ゆ、爲めに嘗つてビスマルクに擬せし者ありガムベツタに擬せし者あり、ヂスレリーに擬せしものあり、クラットストンに擬せし者あり、パーネル、ジョン、モーレイ等に擬せし者あり。近くはルーズヴェルトの名聲隆々として高まりし時、功名心ある者概ね幾許か之に擬せんせしかに見ゆ、かく範を他國に採る事必ずしも悪からざるが言行の一部を見聞し、以つて自ら擬せんせば、時に虎を畫き猫にだも爲るを得ざらん、均しく倣はんならば更に一層詳かにする所なかるべからず。而も斯く模範を求むるは猶ほ可滔々たる者は之れを求むるの慾望なく、偶々之れを求むれば、大石の如き、原の如き止む、志の小なるも餘りに甚だしからず



や。若し自ら知るの明あり言はゞ、其れ迄なり。

藩政の觀るべきにありて國政の觀るべきなく、随つて政治に模範人物を求むる能はずするが、學問は舊と新と全く別なるに拘はらず、優に模範を舊に求むる事を得、即ち舊幕時代の學者は、今の學者の大に學ぶべき所ありし者こそ世平かにして政治上の功名心を満たすに足らず大藩の主にして自ら儒者を以て居り儒道の振作に盡力せるの稀ならず、儒は祿を受くるの少きも、往々侯伯の師として重んぜられ、甲藩に得ざれば、去りて藩に入り、動もすれば禁裏に出入し、或は擢てられて幕布の顧問となれり。同じく鴻儒にして各々能不能ありしも、相ひ接續して三百年を飾り、徳川の歴史は儒者の歴史なるかの觀を呈す。之に對する國學者も一方に雄視し、其の研究に忠實にして良果を後世に残

成功は最後の一步



成功は最後の一步

せる、大ひに稱揚せざるを得ず世態の比較的單純にして煩累の少かりしならんも、其の勤勉の跡を察するに孰れも以つて模範とするに差支へなし。或は務めて勞を省かんし古書に依りて古人を友とせんよりも、現代の有力者と與に俱にせんとするか、是れ亦固より善し、現に我國にも求め得べからざるに非ざれど、十年二十年後には更に求め易き事ならん、歐米は區域の廣くして人も多く各自専門に應じて模範を求むれば何時にても之れを得べし、先進國に倣ひて其の長を採り其の短を捨る、則ち到る事能はざるも、尙ほ多小自ら益するに足る。かくて模範を求むるに難からざるが、學問に關し、我國の過去に之れ有るを忘るべからず、東西を併せ考ふれば、愈々益する所あるべし。

我が國史に於いて模範を求むべきは軍人に次ぎ、則ち學者なり。政治家は少



し、實業に於いて更に遙かに少し、實業は國民の須要に伴ひ、何の之れ無きはなく氣運の消長に與かりし事があるが少くも表面に於いて武士に隸屬し、此と同じくする能はず、實業家も之れを甘んじ、名よりも得を取らんとし、利の爲めに如何なる汚行をも辯せず。汚行の辯せざるが爲めに益々賤蔑せられ、遂に模範として聞ゆる無きに至りたり。されど農工商として順序の成り立ち、農事に關し廣く傳稱せられしあり。二宮尊徳の如き、後人をして大に發憤せしむるに足る。工匠も左甚五郎の如きあり、世は工たる者の斯くの如くならん事を望む、即ち技術の秀で而も利慾に淡泊ならんことを欲するなり。一面に至りては紀文の如き、寺齋の如き甚助の如きあれど、事業より驕奢を以つて知られ、模範たらずして却つて鑑戒たり、眞に業務に勵み、職分を盡し以つて模範とす

成功は最後の一步



成功は最後の一步

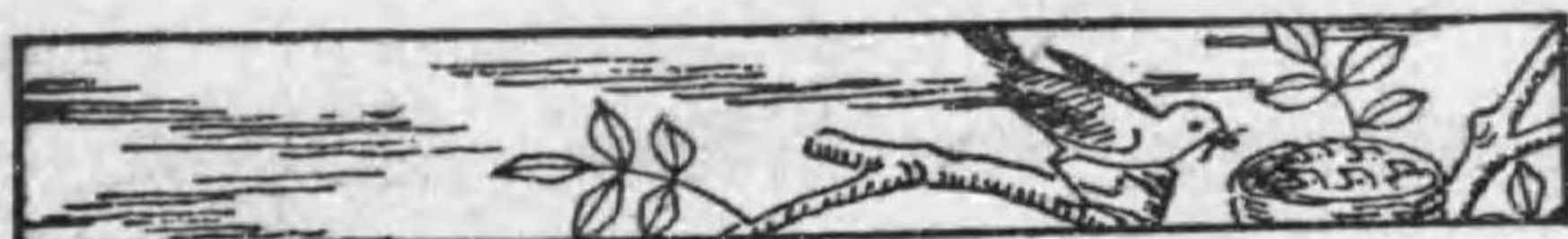
べきあるも、事蹟の詳かならず、詳かにし得るも、現代の事業の参考とするに難し、今は事業云へば主として商業にして、若し充分に發展せば、如何なる邊にまで及ぶやも測られず。適當なる例は、これを歐米に求むるの最も便利なるべし。されど歐米にても、商業に成功する事軍事政治學藝に成功するが如く尊重せられず、第一流のロスチャイルド、ドワンダービルド等著名なる程に敬意を拂はれず。ロツクフェラーの如き、時として悪評頻りに到る。聊か異例に屬するはカルネギーにして、推して模範とするに足るが、猶ほ批難の加へられ、或は罪滅しの慈善なりと言はる、眞に稱揚すべきは、第二流若くは第三流にあらんか、名の聞えざるは人之に倣ふを欲せず、名の聞えたるは瑾疵の蔽ふべからざるあり、商業に於いて模範の求め難きは之れが爲めなりとす。而も我が内



地に於けるよりも、歐米に求め易し工業に於いても亦た然り、總じて實業家の模範は、之れを他國に求むべし。

何の方面にても、我が内地に求むるを得べく、特に軍事及び學問に於いて然りとするが、現在、状態より言へば、歐米に求むるを便とすべく、而して實業に於いて最も然りとす。中外の模範人物を集め、一々比較すれば、相互の間に著るしき差違を見出たすべきが、概観して一に歸すべき無きに非ず、其の一は何んぞ、俗に謂ゆる氣力に富むを之れ指すのみ、他に智慮あるあり、智識あるあり、才幹あるあり、氣魄あるあるも結果に於いて之れに劣り、時として劣るの遠きは、幸不幸もあれど氣力の劣りし事確かに與かれり爲さざるを得ず志大にして才疎なる者、世實に之れ有るも其の挫折するは才の疎なるよりも

成功は最後の一步



成功は最後の一步

氣力の足らざるに由來するの多からずや、屈せず撓まず、失敗して愈々奮ふは才なし。雖も必ず何等か成就する所あり、偶然の出來事を除けば、成敗の別るは、氣力に富む否に存せん。而して氣力は意志によりて強むるを得べきもの、即ち火災に際し、平素揚げ得ざる重荷を軽々しく掲ぐるが如く、奮發次第に豫想外に發揮するを得べし、模範人物の人に示す所は、唯だ奮勵努力せよといふに在り、人皆な之れを知り、而して自ら敢てするに躊躇す。若し眞に奮勵努力せば不可能事の忽然變じて可能事と爲るあらん。意ある處即ち道ありは眞實に庶かし。人生果して一生を奮闘に費すべきか、將た田園に閑居するの樂しからざるか、或は巖穴に隠るゝの妙ならざるか疑問の種々なれど、若し功名心を抑制する能はず、身を挺して、一世に角逐せん欲せば、先づ主として



氣力の如何を考へざるべからず。久しからずして倦厭するが如き、折角の勤勉も徒勞たるに終る。近來奮闘と云ふ語の行はるゝが奮闘の須要資格は一の氣力なり、唯だ氣力なる哉。而も徒らに奮闘するに止るは、人生の意義を失はざるか。是れ以外に爲すべきあるに非ざるか。蓋し別問題に屬す。

成功は最後の一步 終

成功は最後の一步

昭和十年四月十日印刷
昭和十年四月二十日發行

定價五拾錢

不許複製

編輯者 青年修養社

大阪市浪速區元町二丁目十五番地

著作權所有 松浦忠次

大阪市浪速區堀川二丁目一〇五四番地

印刷者 西川正太郎

發行所

大阪市浪速區元町二丁目

宏元社書店

振替大阪五七七二番
電話戎五四六二番

終

